
彼らは二度と会えぬ

神室

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼らは一度と会えぬ

【Zコード】

Z2804Z

【作者名】

神室

【あらすじ】

『万事屋』

彼らは幸せだった。ただ、一緒にいられることが。一緒に泣いて、怒って、喜んで、悔んで、笑って・・・。いつまでもこんな幸せが続いてほしかった。ただ、それだけだったのに・・・。

初めまして。

神室と申します。初めてなんです・・・。

私は色々な小説を読むだけでしたが、書いてみるがなくてですね。
なので、今回は書いてみるに挑戦したいと思います。

しかし、学校でも書くことはありますが何故友達に見せるへりごの
ものでしょ。

だから、せつと上手くは書けておりません。

出来れば温かい田で見てやつてください。

「メントは来るのかな？悪い「メント受けないかな？」い「メント
は？」

・・・とこつも不安に思つてしまつのですが、また温かい田で
直視してあげてください。よろしくお願ひします。

悲しき運命

なんで・・・。

なんで僕らがこんな目にあうんだろう。僕らは何もしていらないのに。

「おい、新ハ。」

声がした。万事屋の社長席から。懐かしく、温かい声が。

「・・・・・！」

振り向いた。

・・・・・　いない。

いつも邪魔くさい白銀の天然パー・マが。死んだ魚のような目が。いない。イナイ。坂田銀時が、いない。どこにも。

「・・・・・」

「新ハ？ 何やつてるネ？」

「神楽ちゃん・・・」

同じ万事屋でバイトしていた夜鬼族の少女、神楽。いつもは明るい声なのに、今日は声が曇っていた。大きく愛らしい目が真っ赤に腫れていた。きっと、沢山泣いたのだろう。

僕と同じようだ。

事件が起きたのは、三日前のことだった。

「はーい、どーも。万事屋でーす」

腐抜けた挨拶で電話に出る万事屋の一人、坂田銀時。
死んだ魚のような目。クリックリの天然パーク。

こうみえて、彼は、攘夷戦争の時『白夜叉』と恐れられていた男。

しかし、今は万事屋を営んでいる男だ。

数時間前の時

電話に出て、数十分ほど話した後。

「おーい。新八。神楽。仕事依頼だぞー。」

部屋中に聞こえるよな大きな声で銀時は叫んだ。

返事が返つてこない。

不思議に思った銀時は、いつも神楽と定春が寝ている押入れを覗き込んだ。

垂れ幕になぜか「ピ〇子」とかいてあるだけだった。

「定春ー。」

「アンツーー。」

定春だけは家にいたらしく、出でくるや否や銀時の頭に食らいついた。

「離れるつーー！今、二日酔いで頭ガンガンしてんだよー。」

定春はしづしづ銀時の頭から離れた。

「たつぐ。おい。神楽はどこ行つた？」

すると定春は玄関に置いてあつた紙切れをくわえて銀時に見せた。

『公園に行つてくるアル。何かあつたら定春と来るヨロシ。』

銀時は呆れた顔で玄関に残つてゐる神楽愛用の傘を見つけた。

いつも神楽はこの傘をさして陽の光が苦手だから必ず持つていくはず。

それに、今日は陽がカンカン照りだ。

「…………」

銀時は定春に目をやつた。

定春は銀時を見つめるだけだった。しかし、なにか言いたげな顔をしてゐる。

「いくなつたら・・テレレテツテレ～～！～～（銀時裏声）」

つっこみがいなことを忘れていた銀時は笑つてくれる人もいないので、

「すべつたな。あ～あ。なんで一人ですべんなきやならぬーんだ・・・。』

まあいい、と猫だか犬だか何の生物だかわからない模様をしたカラ

クリを取りだした。

「ほら。アンだのキャンだの書ってみる。」

なにも言わない定春を銀時は軽く叩いてみた。

すると、定春にすごい勢いで殴り返された。

『『いつてーな。ふざけんじゃねーぞ、この腐れ天パ。脳みそも腐つたか?』』

（そついえば紹介していなかつた。銀時が使つてゐるカラクリは動物言語翻訳機「難蛇故理や阿」別名「なんじやこりやあ」である。

銀時は昨日飲み屋の親父が枝豆の代わりにこれをくれたのだ。（

「意味わかんねーカラクリだなあ。あの親父、枝豆返せこのヤローー」

神楽・新八探し（前書き）

ここから少しがやぐっぽくなりります。

神楽・新八探し

銀時は定春をつれて、神楽が向かつたと思われる公園に行つた。

そこには、なぜか人だかりができていた。

「何やつてんだ？」

よく見ると見覚えのある赤いチャイナ服。そして明るいオレンジの髪。黒い雪洞をつけた少女。

「オラアー！私が勝つたネ！！酢昆布一年分上納するアロシ。」

「一年分つて酢昆布の一日の摂取量が分んねえよ。」

神楽だつた。やっぱり神楽だつた。何があつても神楽だつた。

もう一人、神楽を見下ろしている人物がいた。

明るい茶髪。くりつとした瞳に幼さが残る顔立ち。真選組一番隊隊長沖田総悟だつた。

奴は甘いマスクのサドステイック星の王子だ。（つーか仕事中じやねーのかよ。）

「つーか、俺がすこーしょそ見した瞬間に『隙ありネ！..』つて言いやがつて。」

「ふん…よ見したお前が悪いネ…！」

「…………」

銀時はひとつあえずこの場所を離れたかった。しかし…。

「あつー銀ちゃんー聞いてよ。コイツ、負けを認めないアルヨーー
！！！」

「あーもう。何があつたか聞いてやらあー！」

神楽に聞いてみると、

1時間ほど前、神楽がマダオを殴つて遊んでいたら、沖田が

「おー、そこのチャイナ娘。なにやつていやがんでい。」

と、沖田が注意してきたい。

「人のこと殴つて遊ぶたア、とんだサテイスト怪力娘だな。」

「お前に言われたくないあるア。この変態『ペーーーーーー』が。」

「おー。言ってくれんじゃねーか。この『ペーーーーーー』が。
――』が。」

で、勝負したところ神楽が勝つたらしいが。なんの勝負かはまだ不明だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2804z/>

彼らは二度と会えぬ

2011年12月31日21時51分発行